

つゆのひぬま

山本周五郎

新潮文庫



つゆのひぬま

新潮文庫

草 134 = 19



昭和四十七年二月二十八日 発行
昭和六十年二月二十五日 二十三刷

著 者 山^{やま}本^{もと}周^{しゅう}五^ご郎^{ろう}

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式 会社 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六一五一一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替 東京四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷株式会社 製本・有限会社加藤新栄社

© Kin Shimizu 1972 Printed in Japan

ISBN4-10-113419-7 C0193

新潮文庫

つゆのひぬま

山本周五郎著



新潮社版

2046

目次

武家草鞋	七
おしゃべり物語	三七
山女魚	九
陽気な客	一三五
妹の縁談	一七三
大納言狐	二二
水たたき	二四
凍てのあと	二九
つゆのひぬま	三三

解説 木村久邇典

つ
ゆ
の
ひ
ぬ
ま

武^ぶ

家^け

草^わ
^ら

鞋^じ

一

「あの方はたいそう疲れていらっしやるのですね、お祖父さま、きつとずいぶんお辛い旅が続いたのでしよう、わたくしあの方のお顔を拝見したときすぐにそう思いました」若いむすめの艶やかな声が、秋の午後のひっそりとした庭のほうから聞えてくる、「……並なみのご苦勞ではないのですよ、あのお眼の色でしんそこ疲れきっていらっしやるのがわかります、わたくし胸が痛くなりました、本当にこのところが痛くなりましたの、お祖父さま」

「その土を均すのはお待ち、朽葉を混ぜて少し日に当ててからにしよう」老人のしずかな声がそう云った、「……今年あんなに虫が付いたのは鋤返すとき日に当て方が足りなかったのだろう、可哀そうにこっちの蕨はみんな根がこんなになってしまった」

「ああそれはお捨てにならないで下さいまし、わたくし糊を拵えますから」

宗方伝三郎はうとうとまどろみながら、遠い思い出からの呼び声のように二人の会話を聞いていた。なかば覚めかかって、ああおれはこの家に救われているんだなと思ひ、また夢うつつのように眠ってしまう、ともかくも今は人の情に庇われているという安心と、身も心も虚脱するような疲れとで、起きあがる力さえ感じられないのであった。老人は口数の少ない人とみえてときどきさりげない返辞をするだけだが、娘は話し好きらしく殆んどひっきりなしに声が聞えてくる、それがいかにも明るく爽やかだし、話題はどうでも話してさえいれば楽しいという風で、聞いて

いるほうがしぜんと頬笑ましくなる感じだった。——心ゆたかに育ったんだな、伝三郎は夢ごちちになんどもそう思った、きつと性質もやさしいむすめだろう。

呼び起こされて本当に眼が覚めたのは昏れ方であつた。粥が出来たので此処へ持って来るから顔を洗うようにと云う。伝三郎は起きて頂戴すると答えて夜具をはねた。……娘に案内されて裏へ出ると、若杉の垣の向うはうちひらけた段畑で、その畑地の果てるかなたには、峽間はさまに夕雲のわき立った重畳たる山々が眺められる、垂れさがった鼠色の雲にはもう残照もなく、耕地も森も、薄の白く穂立った叢林も、黄昏のもの哀しげな光りに沈んで、しずかに休息の夜の来るのを待っているようにみえる、なんというしずかさだろう、伝三郎は切なくなるほどの気持で心の内にそう呟いた。

「そんなにご熱心にどこをごらんなさいますの」娘は半挿へ水を汲みながらそう問いかけた、
「……ああ二俣山を捜しておいでなさいますのね」

「二俣山、……ええ、そうです」伝三郎はちよつとまごついた、「そうです、それはどちらのほうですか」

「もっとずっと左のほうでございます、いちばん手前にある低い山のずっと左の端に、こんもりと木の繁った小高い処が見えますでしょう、あれが二俣のお城跡でございます」そう云って娘はふと声を曇らせた、「……わたくしあのお城跡を見ますと、いつも岡崎さまのお痛わしい御最期のはなしを思い出しますの、本当になんというお痛わしい、悲しいお身の上の方でございまして、考えるたびに胸が痛くなりますわ、あなたはそう思召しませんか」

「人間は正しく生きようとする」と伝三郎はふと陰しい口ぶりでそう云った、「……とかく世間から憎まれるものです、岡崎殿の御最期はお痛わしいというより、寧ろ美しい詩だと申上げるほうが本当でしょう、しかしこんな云い方は敗北者の哀れな悲鳴かも知れませんがね」

終りは自分を嘲るような、ひどく棘のある調子だったので、娘はびっくりして大きく眼を瞋りながらこちらを見あげた、伝三郎もいきなりそんな調子でものを云ったことが恥ずかしくなり、娘の眼から遙れるようにさぶさぶと顔を洗いはじめた。岡崎殿とは徳川家康の長男、三郎信康をさす、不運な生れつきのひとで、徳川家のために慚なからぬ功績はありながら、複雑な事情から父に疎んぜられ、天正七年の九月、ついに遠江のくに山香の二俣城で自刃して果てた。原因は説に依って違うが、父家康の内命による死だと伝えられている。いかにも哀史というべきその話は伝三郎もよく知っていたが、眼の前にその遺跡があるうとは気づかなかった、そしてあれがその城跡だと教えられたとき、説明しようのない怒りを感じたのである。それは岡崎殿の悲運が、そのまま自分の身の上を暗示するように想えたからかも知れない。顔を洗いながら、かれは恥ずかしさに背筋へ汗の滲むのを覚えた。

「幾らかお疲れが休まりましたか」食膳につくと老人が労るようにこちらを見ながらそう云った、「……べつにおすすめは致しませんから充分に召しあがって下さい、菲雜炊は疲れにはよいものです」

礼を述べようとしたが口を切る機会を失って、伝三郎は会釈しながら黙って箸をとった、老人は葛布のそまつな袴の膝を折り目正しく坐り、なにか祈念するもののようにじっと瞑目していた。

二

宗方伝三郎は出羽でわのくに新庄しんじょうの藩士で、二百石の書院番を勤めていた、父も謹直なひとだったが、かれはそれに輪をかけたような性質で、少年の頃から清廉潔白ということをやにの信条として育った、けれどもどういいうわけか周囲との折り合が悪く、氣持のうえでも日常生活でも、極めて孤独なおいたちをした。人はよく偏狭な男だとかれを嗤わらった、傲慢ごうまんな独善家だと罵ののした、しかしかれにはそういう人の肚はらがみえ透くのだ。偏狭とはかれが正直いはずだからだし、傲慢と罵るのは廉潔をたてとおすからだ、御都合主義と虚飾でかためた世間の人々には、かれの純粹に生きようとする態度が、滑稽こっけいでもありけむたかったのである。

——嗤うなら嗤え、真実であることは嘲笑ちやうしやうされるだけで価値を失いはしない、どっちが正しいかはやがてわかるだろう、いつかはおれの真実がかれらの虚飾に勝つときがくる。

かれはそう信じていた、というよりもそう信じなければ生きてゆけないような立場に立たされていたのである。

貞享三年じやうきやうの春、新庄藩に家督問題かとくがおこった、藩主の戸沢能登守正誠のとのかみには五人の子があっただけで、男子はみな早世し、正誠もすでに老齡に及んだので、その世継をきめなければならぬ時となった。そこで他家へ嫁よめしている正誠の息女の血筋を入れようという説と、家臣ではあるが遠い血統けつとうになっている榑岡兵右衛門ならおかひやうえもんの二男を入れる説と、この二つの論が出てかなり紛糾した。だが能登守は初めから兵右衛門の二男をとる積りだったので、間もなく榑岡内記正庸が嗣子ときま

り、この問題は終った。このとき伝三郎は内記を入れることに反対であった、他家へ嫁した息女が二人もあり、それぞれに子があるから、これこそ御しゆくん直系のお血筋とすべきである、槽岡もお血統きではあるが家臣で、家来から世継をとるということは藩家将来の綱紀にかかわり兼ねない。……そういう一部の老臣の説を尤もだと信じて、かれはあくまで内記を迎えることに反対しとおした。そして能登守の意志が動かすべからずと知って、一部の老臣たちが説を翻してからも、かれと数名の者は頑として主張を変えず、ついに上役や老臣と衝突して、いさぎよく戸沢家を退身してしまったのだ。

——反対したのは内記さまそのひとが問題ではなく、主家将来の綱紀のためである。しかし内記さまを迎える以上、反対した者がそのまま職にとどまるのは、逆に綱紀の障りとなり兼ねない、なぜなら君臣のあいだには、微塵も隔てがあつてはならないのだから。

そう考えたことに嘘はないし、退身した点もかえりみて愧ずかしくはない、それにもかかわらず、心のどこかに一種の敗北感があつた、正しいと信じて身を処したのに、負けて逃げだすような屈辱的な感じが脳裡から去らない、これは伝三郎にとって堪えがたいものだった。いつかは真実と虚飾の位置を明らかにしてみせる、そう思つて孤独をおしてきたのだが、結果としてはまるで逆になった、——偏狭なやつだ、ばか律義な男だ、そう云つて嘲笑する人々の声が聞えるように、かれは忿りのために幾たびとなく身を震わした。

親族たちにも相談をせず、新庄をたちのいた伝三郎は、僅かな貯えを持って江戸へ出た、武士でなくともよい、清潔に生きる道でさえあればどんなことでもしよう、そう決心していたのであ

る、けれども実際に当ってみるとそれは殆んど不可能なことだった。貞享、元祿といえは幕府政体もおちつくところへおちつき、商工業の發達と文化の興隆のめざましさににおいてまさに画期的な年代であつたが、殊に新しく勃興してきた商人階級のちからは、ともすると武家の權威をすら凌ぐ勢いを示し、世は挙げて富貴と歡樂を追求する風潮に傾いていた、西鶴の永代蔵に「……士農工商のほか出家神職にかぎらず、始末大明神の御託宣にまかせて金銀を溜むべし、是ふた親のほかは命の親なり」といい、また続けて「……世にあるほどの願ひ何によらず、銀徳にてかなはざる事なし」といつている、また——親子の仲でも金は他人、などという言葉がなんのふしぎもなく人の口にのぼるありさまで、すべてが金であり利潤であつた、貧しい者はもとより富める者はさらに富もうとして、どんな機会をものがすまいと血まなこになつてゐる、伝三郎はそういう世の中へはいつていったのだ。武士として育ち、またかれのような性格をもつて、こういう世相に順応できないのは当然である、新庄藩においてすら敗北したかれの廉潔心は、江戸へ出るがいなやもつとてひどく叩きのめされた、それは武家生活におけるような生やさしいものではなかつた、一年あまりの暮しで、骨の髄までかれは叩きのめされたのである。

三

「わたくしは誇張して申すのではございません、また世間の俗悪卑賤をいちいち申し上げようとも思いません、しかし世の中も、人間も、醜惡な、みさげはてたもので充満しています、しかもそれが堂々と、威張りかえつて……」

手作りの風雅な行燈あんどんの中で、油の燃える呟つぶやきがしずかに聞えている、老人と相對あたいして坐った伝三郎はこめかみのあたりに太い筋をあらわしながら、いかにも忿懣ふんまんに堪たえぬという口調で語りついだ。

「物を売る商人は、物を売るのでなく代価を取るのが目的です、筆を買えば筆の穂は三日も経つと取れてしまう、手拭てぬぐいを買えば幾らも使わぬうちに地がほつれてぼろぼろになる、足袋たびは縫目から破れるし草履ぞうりはすぐに緒が抜ける、……錢さえ取ってしまえばよい、売った品物がどんなごまかしでも、そのために人がどんな迷惑をしようと構わない、ただ錢、錢さえ儲ければよいということです、しかもこういう氣風は商人に限りません、世間ぜんたいが欺瞞ぎまんと狡猾こうかつとの組み合わせです、こんなことでいいのでしょうか」伝三郎はぶるぶると震えた、「……これで世の中がなりたつてゆくでしょうか、こんなに墮落しながら恬てんとして恥じない、寧ろみんな当然のような顔をしている、本当にこんなことでよいのでしょうか、こんな乱離たることで」

老人は袴はかまの膝ひざへ両手を置き、なかば閉じた眼で壁のあたりを眺めながら黙って聴いていた。戸沢家を退身して以来の身の上のそこまで語ってきて、伝三郎は回想することのやりきれなさに参加さんかしたらしい、「……そこでわたくしは江戸を逃げだしました」と云うと、暫く忿いりを鎮しずめるようにむっと口を噤つぶんだ。

「……しかし何処どこへいっても同じことでした、どうかして生きる道を捉つかもうと、ちからのあるだけはやってみたのですが、結局はこちらの敗北です、わたくしはほとほと疲れました、もうたくさんだという氣持です、これ以上は自分もそういう仲間にはいるか、それとも生きることをやめ

るか、二つのうち一つを選ぶより仕方がない、そしてわたくしは後者を選んだのです、こんな俗悪な世間に生きるよりは、寧ろ人間の匂いにおのない深山へは行って死のう、そう決心を致いたしました、そして残っている貯えたくわのあるうちは安宿に泊り、無くなつてからは野宿をしながら、殆んど水を飲み飲みここまで辿りついて来たのです、もしも救つて頂かなかつたら、あのとき倒れたまま死んだことでございましょう」

寧ろそのほうが本望だった、そう云いたげに伝三郎は話を終った。老人はかれの話が終つてからもながいこと黙っていたが、やや暫くして、しずかに、魴いたわりのこもった調子でゆっくりと云つた。

「まったく、世間というものはむずかしいものです、山へは行って死のうとまでお考えなすつた、その気持もよくわかります、……わたくしなどはごらんのとおり山家の老耄人ろうもうにんでなにも知らず、意見の申上げようもなし、ただご尤ももつとと申すよりほかに言葉もございせんが、しかしこうしてわたくし共でお世話をするというのもなにかの御縁でございましょう、こんなところでよろしかったら暫くおからだを休めておいでなさいまし、そのうちには少しは気持もお楽になるかも知れません、考えようによつては、これでなかなか世の中も捨てたものではございせんから」

「ご老人はさようにお考えなさいますか」

「世間はひろく人はさまざまです、思うようになる事ばかりでも興がないと申すではございませんか、まあ暫くはなにもお考えなさらず、できることならゆっくりとご保養をなさいまし」

淡々としたなかに、冬の日だまりのような温かみのある老人の言葉は、それだけでも伝三郎の